金　子　能　宏　教授

金子能宏教授年譜及び業績目録等一覧

〈年譜〉

学歴

1974（昭和 49）年４月　東京都立武蔵丘高等学校　入学
1977（昭和 52）年３月　東京都立武蔵丘高等学校　卒業
1979（昭和 54）年４月　一橋大学社会学部　入学
1983（昭和 58）年３月　一橋大学社会学部　卒業
1983（昭和 58）年４月　一橋大学経済学部　入学（学士入学）
1985（昭和 60）年３月　一橋大学経済学部　卒業
1985（昭和 60）年４月　一橋大学大学院経済学研究科（修士課程）　入学
1987（昭和 62）年３月　同上　修了（経済学修士）
1987（昭和 62）年４月　一橋大学大学院経済学研究科（博士課程）　入学
1990（平成 2）年３月　同上　単位取得退学
1993（平成 5）年 11 月　経済学博士取得（一橋大学）
1996（平成 8）年７月　イタリア労使関係研究協会会長主催労使関係セミナー修了（修了証取得）
2003（平成 15）年９月　スウェーデン・カロリンスカ医科大学自殺予防研修修了（修了証取得）

学位

1987（昭和 62）年３月　経済学修士（一橋大学）
1993（平成 5）年 11 月　経済学博士（一橋大学）

職歴

1990（平成 2）年４月～ 1991（平成 3）年３月
一橋大学経済学部　助手
1991（平成 3）年４月～ 1993（平成 5）年３月
独立行政法人日本学術振興会　特別研究員
1993（平成 5）年４月～ 1996（平成 8）年 10 月
特殊法人日本労働研究機構　研究員
1996（平成 8）年 11 月
特殊法人社会保障研究所　主任研究員

1996（平成 8）年 12 月～ 2003（平成 15）年 12 月
国立社会保障・人口問題研究所　社会保障応用分析研究部室長
1998（平成 10）年 9 月～ 1999 年 6 月
日米教育委員会フルブライト交流事業　在外研究員（NBER 及びスタンフォード大学経済学部）
2004（平成 16）年 1 月～ 2010（平成 22）年 3 月
国立社会保障・人口問題研究所　社会保障応用分析研究部長
2004（平成 16）年 4 月～ 2006（平成 18）年 3 月
経済産業省・独立行政法人経済産業研究所　コンサルティングフェロー
2010（平成 22）年 1 月～ 2014（平成 26）年 3 月
国立社会保障・人口問題研究所　社会保障基礎理論研究部長
2014（平成 26）年 4 月～ 2016（平成 28）年 7 月
国立社会保障・人口問題研究所　政策研究連携担当参与
2016（平成 28）年 8 月～ 2018（平成 30）年 3 月
国立大学法人・一橋大学　経済研究所　教授
2018（平成 30）年 4 月～ 2019（令和 1）年 9 月
学校法人日本社会事業大学　教授

教育歴

1992（平成 4）年 4 月～ 1993（平成 5）年 3 月
横浜国立大学経済学部「経済学」 非常勤講師
1994（平成 6）年 4 月～ 1997（平成 9）年 3 月
横浜国立大学経済学部「経済学」 非常勤講師
1997（平成 9）年 4 月～ 1998（平成 10）年 3 月
横浜国立大学経済学部「経済学」 非常勤講師
2002（平成 14）年 4 月～ 2004（平成 16）年 3 月
横浜市立大学商学部「社会保障論」 非常勤講師
2004（平成 16）年 4 月～ 2006（平成 18）年 3 月
お茶の水女子大学大学院人間文化研究科　客員助教授
2016（平成 28）年 11 月～ 2017（平成 29）年 1 月
国立大学法人東京工業大学　環境・社会理工学院「社会科学分野分析統合演習 F1B（財政学）」 非常勤講師
2014（平成 26）年 4 月～ 2018（平成 30）年 3 月
横浜市立大国際教養学部「社会保障論」 非常勤講師

受賞

平成 8 年度（第 19 回）労働関係図書優秀賞（日本労働研究研修機構・読売新聞社）

受賞図書：田近栄治・林文子・金子能宏『年金の経済分析―保険の視点』（東洋経済新報社），1996 年 1 月，254 頁

資格

1985（昭和 60）年　普通自動車運転免許
1985（昭和 60）年 8 月　国家公務員試験Ⅰ種（経済職）　合格
1989（平成 1）年 8 月　国家公務員試験Ⅰ種（経済職）　合格

業績目録

主要業績

○金子能宏「障害者の暮らしと家族をどうささえていくか」井堀利宏・金子能宏・野口晴子『新たなリスクと社会保障 生涯を通じた支援策の構築』（東京大学出版会），第 13 章，pp.251-271，2012 年 10 月
○金子能宏「親の子どものための支出・経済的援助と社会保障給付との関係―代替的関係と補完的関係に関する実証分析―」『季刊社会保障研究』，46（4），pp.326-341，2011 年 3 月
○*Kaneko,Y. 'Corporate Pension Reform in Japan and the Effect of Frequency of Job Changes by Middle-Aged and Elderly Workers', in Jun-Young Kim and Per-Gunner Svenson eds. Domein Lincages and Privatization in Social Security（Ashgate Publishing Company, U.K），pp.161-197, 2000 年

研究業績一覧

Ⅰ．著書（共編著含む）

西村周三・京極高宣・金子能宏『社会保障の国際比較研究―制度再考にむけた学際的・政策科学的アプローチ』（ミネルヴァ書房），2014 年 6 月，285 頁
井堀利宏・金子能宏・野口晴子『新たなリスクと社会保障生涯を通じた支援策の構築』（東京大学出版会），2012 年 10 月，336 頁
京極高宣・金子能宏『社会保障と社会市場論―社会保障の一般理論を考える』（社会保険研究所），2012 年 12 月，384 頁
浅野幸弘・金子能宏『企業年金ビッグバン―グローバル・スタンダードからみた課題と改革』（東洋経済新報社），1998 年 5 月，249 頁
田近栄治・林文子・金子能宏『年金の経済分析―保険の視点』（東洋経済新報社），1996 年 1 月，254 頁（平成 8 年度（第 19 回）労働関係図書優秀賞（日本労働研究研修機構・読売新聞社））

Ⅱ．学術論文（単著）

金子能宏「自殺対策の効果とその評価」，本橋豊編『よくわかる自殺対策―他分野連携と現場力で「いのち」を守る』（ぎょうせい），第１部第３章（13），pp.68-75，2015 年４月

金子能宏「日本残疾人福利政策的経済和効果」鄭功成主編『社会保障研究』（中国人民大学中国社会保障研究中心・中国労働社会保障出版社），2014 年第１巻，pp.173-189，2014 年

Kaneko, Y ”Population ageing and old-age income security in Japan, Proceedings of International Conference on Population Ageing and Old-age Income Security, Korea Institute for Health and Social Affairs，2013 年 11 月

金子能宏「比較福祉国家研究からみた中国の社会保障制度の位置づけ」，（独立行政法人）科学技術振興機構中国総合研究センター編『中国の社会保障制度の現状と動向』，pp.148-165，2013 年

金子能宏「社会保障財政および個人負担への影響」西村周三監修／国立社会保障・人口問題研究所編『地域包括ケアシステム』（慶應義塾大学出版会），pp.47-70，2013 年３月

金子能宏「家族の助け合いはなくなったのか」『日本社会の生活不安―自助・共助・公助の新たなかたち―』西村周三監修／国立社会保障･人口問題研究所編（慶應義塾大学出版会），pp.201-220，2012 年３月

金子能宏「社会保障分野における技術進歩，産業発展と経済成長」『季刊社会保障研究』，47(2)，pp.119-133，2011 年９月

金子能宏「経済成長・社会的安定性と社会保障の役割」，朱炎・渡辺利夫編『中国経済の成長持続性―促進要因と抑制要因の分析―』（勁草書房），pp.51-85，2011 年７月

金子能宏「親の子どものための支出・経済的援助と社会保障給付との関係―代替的関係と補完的関係に関する実証分析―」『季刊社会保障研究』，46(4)，2011 年３月，pp.326-341.

金子能宏「経済問題（社会的問題）からみた現代日本の自殺」張賢徳編『専門医のための精神科臨床リュミエール 第 29 巻 自殺予防の基本戦略』（中山書店），2011 年２月.

Kaneko, Y. ”Social Safety Net Capacity Building Programs in JAPAN”, Proceedings of ASEAN Workshop on Social Safety Nets Capacity Building, Korea Institute for Health and Social Affairs，2010 年 12 月

金子能宏「OECD 諸国の社会保障政策と社会支出」，宮島洋・西村周三・京極高宣編『講座 社会保障と経済２ 財政と所得保障』（東京大学出版会）第８章，2010 年

金子能宏「医療保険制度の展開と日本経済への影響」，内閣府経済社会総合研究所 企画・監修／井堀利宏編『財政政策と社会保障』（慶應義塾大学出版会），2010 年

金子能宏「社会保障財源としての消費税負担の影響―消費者物価水準への転嫁の検証」，国立社会保障・人口問題研究所編『社会保障財源の効果分析』（東京大学出版会），2009

年４月
Kaneko,Y., A.Yamasaki, and K.Arai, ”The Shinto religion and suicide in Japan”, Oxford Textbook of Suicidology and Suicide Prevention, Edited by Danuta Wasserman and Camilla Wasserman, Part 1 (Suicide in a Religious and Cross-cultural Perspective), Ch.6, pp. DOI:10.1093/med/9780198570059.003.0006, 2009 年３月
金子能宏「拡大 EU の社会保障支出の将来推計―EU における高齢化の社会保障支出に及ぼす影響に関する研究の展開」『海外社会保障研究』No.165，pp.25-40，2008 年 12 月
金子能宏「障害者の所得保障と福祉施策の経済効果」『ファイナンシャル・レビュー』通巻第 87 号，2007 年
Kaneko, Y. “Public Pension Reforms under the Diversification of Working Status in Japan”, Why JAPAN Matters!” eds. by J.F.kess and H.lonsdowne (University of Victoria Press), 2005 年，pp.288-304.
金子能宏「収入差距的変化与養老保険改革課題」『社会保障研究』(中国人民大学), 第２巻１号, pp.112-113，2005 年
金子能宏「少子高齢化社会の社会保障財政」『ジュリスト』，2005 年１月 1-15 日号 (No.1282)
金子能宏「自殺予防：心の健康リスクに応えるための社会保障」『季刊社会保障研究』，40(1)，pp.2-3．2004 年６月
金子能宏「カナダの国民医療制度の改革動向―連邦財政主義のもとでの皆保険の課題と展望―」『海外社会保障研究』，第 145 号，pp53-67．2003 年 12 月
金子能宏「障害者雇用政策とバリアフリー施策の連携―障害者の福祉と国民経済への影響―」『季刊社会保障研究』，37(3) pp.228-243，2001 年 12 月
金子能宏「バリアフリー施策の国民経済への影響」『バリアフリー化の社会経済的評価の確立に向けて　国土交通政策研究』第３号（国土交通政策研究所），pp.112-127，2001 年６月
金子能宏「高齢者の世帯構造と医療需要」『季刊社会保障研究』36(1)，pp.134-148，2000 年６月
金子能宏「高年齢者の所得構成と医療需要」国立社会保障・人口問題研究所編『家族世帯の変容と生活保障機能』（東京大学出版会）第 14 章，2000 年
金子能宏「所得の不平等化要因と所得再分配政策の課題」『季刊社会保障研究』，35(4)，pp.420-435，2000 年３月
金子能宏「中高年者の退職と企業年金の使途―企業年金の貯蓄分析」『季刊　年金と雇用』，17(4)，1999 年２月
Kaneko, Y. “Asset Demand and Welfare Cost of Capital Income Taxes in A Life-Cycle Setting -Application to Japanese Households”, The

Economic Studies Quarterly（『季刊理論経済学』日本経済学会），Vo145, No.2，pp.159-178, 1994 年

金子能宏「高齢者の資本所得税と資本蓄積―貨幣的成長モデルの応用―」『季刊社会保障研究』, 39(3)，pp.222-231, 1993 年 12 月

金子能宏「資本所得課税の分析とわが国における世代別家計の消費の異時点間弾力性」『フィナンシャル・レビュー』通巻第 20 号，pp.34-52，1991 年

金子能宏「資産需要の双対性アプローチと資産所得課税の厚生効果の分析―距離関数の適用可能性とその特定化」『一橋論叢』（一橋大学一橋学会一橋論叢編集所編）第 104 巻 6 号，pp.803-821，1990 年 12 月

金子能宏「拡張された需要関数の推定と課税の死荷重の推計」『一橋論叢』（一橋大学一橋学会一橋論叢編集所編）第 101 巻 6 号，pp.852-875，1989 年 6 月

Ⅲ．学術論文（共著）

鈴木亘・金子能宏「高齢者医療において政府はどこまで責任を持つべきか」，八潮尚弘・鈴木亘編『成長産業としての医療と介護―少子高齢化と財源難にどう取り組むか―』（日本経済新聞出版社），2011 年 11 月

鈴木亘・金子能宏「アンケート調査に基づく患者負担と医療給付のあり方に関する考察」『経済論集（学習院大学)』, 47(3)，2010 年

「中国における公的年金制度の再分配効果と持続可能性との関係：保険数理的な将来推計による分析」金子能宏・雍煒,『比較経済研究』，第 47 巻第 1 号，2010 年 1 月

金子能宏・米山正敏「社会保険料と税に関する賦課徴収の理論と実態」，国立社会保障・人口問題研究所編『社会保障財源の制度分析』（東京大学出版会），2009 年 4 月

Hashimoto H, Noguchi H, Heidereich P, Synina O, Moreland A, Miyazaki S, Ikeda S., Kaneko Y, Ikegami N, ”The diffusion of medical technology, local conditions, and technology re-invention: a comparative case study on coronary stenting”, Health Policy, 79(2-3), pp.221-230, 2006 年 12 月

金子能宏・S. プーチット「社会保障財源としての消費税負担の影響―消費者物価水準への転嫁の検証―」,『季刊社会保障研究』，42(3)，pp.219-234，2006 年 12 月

中田大吾・金子能宏「女性活用策と経済成長」，橘木俊詔編著『現代女性の労働・結婚・子育て』（ミネルヴァ書房）第 8 章，pp.221-245，2005 年 10 月

菊池英明・金子能宏「社会保障における住宅政策の位置づけ―福祉国家論からのアプローチ―」『海外社会保障研究』, 152，pp.3-17，2005 年 9 月

金子能宏・篠崎武久・山崎暁子「自殺の社会経済的要因と自殺予防の経済効果」『季刊社会保障研究』, 40(1)，pp. 75-87，2004 年 6 月

金子能宏・山本志穂，山崎暁子「なぜ自殺？働きざかり（中高年）の自殺の問題」『こころの社会医学研究』，第 30 巻 1 号，2004 年

金子能宏・石川英樹・中田大悟「非正規就業者の増大のもとでの厚生年金適用拡大と国民年金の経済的効果」『季刊社会保障研究』，41(2)，pp.153-165，2004 年 9 月
金子能宏・篠崎武久「自殺の社会的費用と自殺防止対策の経済効果」『労働の科学』59(1)，2004 年 10 月，pp.21・24，2004 年 1 月
山田聖子・金子能宏「子供のリスク分散の役割が家計の資産選択に及ぼす影響について」『医療と社会』，第 13 巻 3 号，pp.131-145，2003 年
金子能宏・中田大悟・宮里尚三「年金と財政―基礎年金給付の国庫負担水準の影響―」『季刊家計経済研究』，No.60，2003 年
金子能宏・岩田克彦「ワークシェアリングと労働・社会保障政策」『年金と経済』，21(3)，2002 年
金子能宏・小島克久「地域格差と所得格差を考慮した社会保障研究の展開―日本とカナダの比較―」『海外社会保障研究』，No.139，2002 年，pp.60-80.
金子能宏・淺子和美「労働市場の変化と子育て支援策の展開」国立社会保障・人目問題研究所編『少子社会の子育て支援』（東京大学出版会）第 8 章，2002 年
宮里尚三・金子能宏「一般均衡マクロ動学モデルによる公的年金改革の経済分析」『季刊社会保障研究』，37(2)，pp.174-182，2001 年 9 月
金子能宏・山本克也「公平性の基準と厚生年金改革の効果」『季刊社会保障研究』，36(3)，2000 年，pp.435-453.
高山憲之・小川浩・吉田浩・有田富美子・金子能宏・小島克久「結婚・育児の経済コストと出生力―少子化の経済学的要因に関する一考察―」『人口問題研究』第 56 巻第 4 号，pp.1-18，2000 年 12 月
森田陽子・金子能宏「育児休業制度の普及と女性雇用者の勤続年数」『日本労働研究雑誌』，40(9)（通巻 459），pp.50-62，1998 年 9 月
金子能宏・高橋桂子「企業年金の普及と高年齢者の就業・引退行動」『季刊社会保障研究』，33(2)，pp.177-190，1997 年 9 月
金子能宏・田近栄治「厚生年金の財政と世代間負担―フェア年金の構想」『季刊社会保障研究』，30(4)，pp.399-414，1995 年
金子能宏・田近栄治「厚生年金（旧法）財政の実態と評価」『季刊社会保障研究』，30(1)，pp.49-61. 1995 年
金子能宏・田近栄治「勤労所得税と間接税の厚生コストの計測―勤労者標準世帯の場合―」『フィナンシャル・レビュー』通巻第 15 号，1989 年

Ⅳ．翻訳書（共訳含む）

小島克久・金子能宏訳／経済協力開発機構（OECD）編著『格差拡大の真実―二極化の要因を解き明かす』（明石書店），2014 年 10 月
小島克久・金子能宏／経済協力開発機構（OECD）編著『格差は拡大しているか―OECD 加盟国における所得分布と貧困―』（明石書店），2010 年 10 月

V. 調査研究報告書

金子能宏（研究代表者）『社会保障負担のあり方に関する研究』平成 14 ～ 15 年度生労働科学研究費補助金研究（政策科学推進研究事業）総合・総括研究報告書，2004 年 3 月.

金子能宏（研究代表者）『医療負担のあり方が医療需要と健康・福祉の水準に及ぼす影響に関する研究』平成 14 ～ 15 年度生労働科学研究費補助金研究（政策科学推進研究事業）総合・総括研究報告書，2004 年 3 月.

金子能宏（研究代表者）『我が国の所得・資産格差の実証分析と社会保障の給付と負担の在り方に関する研究』平成 16 ～ 17 年度生労働科学研究費補助金研究（政策科学推進研究事業）総合・総括研究報告書，2006 年 8 月.

金子能宏（研究代表者）『税制と社会保障に関する研究』平成 17 ～ 18 年度生労働科学研究費補助金研究（政策科学推進研究事業）総合・総括研究報告書，2007 年 3 月.

金子能宏（研究代表者）『所得・資産・消費と社会保険料・税の関係に着目した社会保障の給付の在り方に関する研究』平成 19 ～ 21 年度生労働科学研究費補助金研究（政策科学推進研究事業）総合・総括研究報告書，2010 年 3 月.

金子能宏（研究代表者）『社会保障給付の人的側面と社会保障財政の在り方に関する研究』平成 22 ～ 24 年度生労働科学研究費補助金研究（政策科学推進研究事業）総合・総括研究報告書，2013 年 3 月.

金子能宏（研究代表者）『障害者の生活実態・ニーズ把握による障害保健福祉政策の在り方に関する研究』平成 24 年度生労働科学研究費補助金研究（障害者対策総合科学推進研究事業）総合・総括研究報告書，2013 年 3 月.

献呈の辞

日本社会事業大学名誉教授
神　野　直　彦

「消え去りし友」、金子能宏教授の御霊(みたま)に謹んで献呈するために、この研究紀要は刊行されている。献呈にあたり、悲しみを振り払いながら、「消え去りし友」と「共」にした「生」を追憶し、献詞(けんし)として捧げたい。

金子教授との連絡が途絶えたことを心配して、教務部のスタッフが金子教授の住まうマンションに駆けつけたのは、生命が躍動する夏が終わりを告げた2019年9月16日のことである。金子教授のマンションは浅草にある。金子教授が熟慮に熟慮を重ねて選んだ住まいである。

すぐ傍に、首都高速の出入り口があり、移動手段を車に依存せざるをえない金子教授にとっては、絶好のロケーションとなっていた。しかも、そのマンションはバリア・フリーとなっているばかりか、眼下に隅田川が流れているため、高層ビルに囲まれた都心にもかかわらず、広々とした心休まる眺望を楽しむことができる。私が訪れるたびに、金子教授は「今度は隅田川の花火の時にお出で下さい。ここは特等席ですから」と温かい言葉をかけてくれたことを想い起こす。

マンションの真下にある交差点を渡ると、金子教授がお気にいりの蕎麦処がある。私がマンションを訪れると、必ず車椅子を押しながら、その蕎麦処に赴き、二人で舌鼓を打ったものである。そうした至福の時に、金子教授は満面の笑みを浮かべ、私のために熱弁を振るって講義をしてくれたのである。

そのマンションに駆けつけた教務部の椎名課長から、私は逐一(ちくいち)、状況説明を受けていた。時の流れは最悪の事態へと進んでしまう。金子教授が息を引き取ったことが確認されたとの報告を受け、私は深い絶望の淵へと突き落とされたのである。

金子教授はまるで「生命」そのものであるかのように、私の前にふらりと現れ、ふらりと去っていった。金子教授がこの世に「生」を受けたのは、1958年9月21日のことである。この世から旅立ったのは敢えて繰り返すと、2019年9月16日のことである。つまり、再び生まれかえる還暦とともに、黄泉へと旅立たれたことになる。

金子教授が私の前に、人懐っこい笑顔を浮かべながら、ふらりと現れたのは、金子教授が研究員を務められていた社会保障研究所が国立社会保障・人口問題研究所に改組される前後だったと記憶している。金子教授は1979年に一橋大学の社会学部に入学され、経済学部へと学士入学されて、1985年に一橋大学経済学部を卒業されている。卒業と同時に、一橋大学大学院経済学研究科の修士課程に入学された上で、進学された博士課程を1990年に単位取得退学されている。

金子教授は財政学の権威であった石弘光先生の指導のもとで財政学を専攻し、1993年に経済学博士を取得している。金子教授は公務員を志したこともあったようだけれども、真理を探究することに生きる価値を見い出し、研究者の道を歩まれていく。研究者の道を選択するにあたって、日本社会事業大学の講義を、御母堂に連れられて聴講されたことが契機となったと

述懐されていた。そのためか金子教授は財政学というよりも、日本の社会保障研究を索引する旗手として活躍されることとなったのである。

社会科学が社会現象を分析するアプローチには、生成の論理によるアプローチと、循環の論理によるアプローチがある。私はドイツの歴史学派の伝統から生まれた財政学を継承して、生成の論理で社会現象をアプローチしようとしている。金子教授はといえば、新古典派総合の経済学を基盤にして、循環の論理によるアプローチで、数量分析を駆使して社会保障の実証分析や効果分析に取り組まれてきたといってよい。

こうした金子教授の業績については、私がここで敢えて紹介するまでもないはずである。さらに私は国立社会保障・人口問題研究所などで、金子教授が多くの研究プロジェクトを組織されていることに畏敬の念を抱いていた。

そこで私は日本社会事業大学が学長に就任するや、金子教授に日本社会事業大学で社会保障にかかわる研究と教育をリードしていただけないかという夢を抱くことになる。その夢がかない 2018 年 4 月 1 日に、金子教授は日本社会事業大学に着任されたのである。

金子教授は 2016 年に国立社会保障・人口問題研究所から一橋大学経済学部研究所に移り、重要な研究プロジェクトを担われ、研究活動に心血を注がれてきた。しかし、大学は研究を教育と融合して実施しなければならない。

私は研究中心に生きてこられた金子教授に、研究も教育も担い、それらを融合させていく営みで、過酷な労苦を強いてしまったのではないかと慚愧に耐えない。金子教授の死が確認されたとの報告を受けた時に、私は言い知れぬ深い悲しみに打ち拉がれる。しかも、時の経過は悲しみを癒すのではなく、自己の責任の重さを突きつけるばかりなのである。

金子教授に接すると、自分は何と浅ましい人間なのだろうという嫌悪感に陥る。というのも、辛く苦しい経験を重ねられたのではないかないかと推察されるのに、金子教授は「生」を「共」にした人たちによって、自分は生かされているという感謝の心を抱いて、「生」を貫かれたからである。それは金子教授が「生」を「共」にした人たちから、愛されていたことの別表現でもある。

金子教授の葬儀は、「生」を「共」にした優しき人たちの愛と悲しみに溢れた。金子教授の恩師石弘光先生は、私の高校の先輩である。そのため私自身も石先生の研究指導を受けたどころか、令夫人にもお世話になっている。その石先生がこの世を去られると、金子教授は後を追うように旅立たれた。「生」を「共」にした人たちに愛された金子教授の葬儀には、石先生の令夫人も悲しみの分かち合うように参列されたことに、私は深く心を動かされたのである。

人間は「星の子どもたち」である。原子は宇宙でしか創られない。宇宙で創られた原子が、遠い旅路の果てに、人間の肉体を構成しているからである。金子教授は突然の如くに、私の前から消え、「星」に戻られてしまった。

しかし、自己の存在は、他者の意識で挙証するしかない。金子教授は未だ私の意識に厳然と存在している。私の意識が消滅しない限り、そのため金子教授は存在し続ける。私は未だに自分の疑問を金子教授にぶつけることができ、金子教授の教えに導かれることができる。それに感謝しながら、私ももうすぐ逝くから待ってて欲しいと告げ、「消え去りし友」への献詞としたい。

2021 年 12 月冬の雨の日